

障害者の演劇活動における参加者の相互作用と社会的発信

— 実践参加者へのインタビュー調査から —

松本奈津実・安井 友康*

北海道教育大学大学院教育学研究科

*北海道教育大学札幌校障害福祉研究室

Interactions between Participants and Social Output through Theater Activities of Persons with Disabilities

— Based on Interviews with Participants —

MATSUMOTO Natsumi and YASUI Tomoyasu*

Graduate School of Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

*Department of Welfare for Persons with Disabilities, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本研究は、障害者通所施設の利用者が参加する演劇活動において、参加者にインタビュー調査を行い、参加者間の相互作用のプロセスと地域社会への発信について質的な分析を行った。その結果、障害のある参加者と障害のない参加者双方における相互作用として、「交流の楽しさ」や「コミュニケーション面での成長」などが確認された。これらの体験は、仲間との絆意識につながるとともに、表現活動としての公演を通じた達成感を得ることにつながっていた。さらにこのような達成感は、アウトプットとしての地域社会とのさらなる交流の継続欲求へとつながっていた。

I. はじめに

近年、日本の文化芸術の政策は、大きな転換期を迎えている。2017年6月に「文化芸術振興基本法の一部を改正する法律」が公布、施行され、「文化芸術基本法」と改められた。本法には、文化や芸術の振興にとどまらず、観光やまちづくり、福

祉、教育、産業などの幅広い分野と連携した文化政策を推進することが示されている（文化庁、2017）。

また2018年6月には、「文化芸術基本法」および「障害者基本法」の理念を受けて、障害者による文化芸術活動の推進に関する施策を総合的かつ計画的に推進するため、「障害者による文化芸術

活動の推進に関する法律（以下、障害者文化芸術推進法）」が公布、施行され、文化芸術が「障害の有無にかかわらず、人々に心の豊かさや相互理解をもたらす」ことが明記された（文化庁、2018）。これにより2019年には、文部科学省と厚生労働省より「障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画（以下、基本計画とする）」が策定される運びとなった（文化庁、2019）。

これまで筆者らは、北海道深川市における障害者と健常者が参加するインクルーシブな演劇活動の実践を取り上げ、障害のある参加者の変化に着目した分析を行ってきた（松本・安井、2019）。その結果、障害者の演劇活動への参加が、地域社会の社会包摂の促進につながることが構造的に明らかになった。

しかし支援スタッフなど、障害のない参加者を含めた相互作用の視点からの分析が求められるとともに、3年間の演劇プロジェクトの終了後において参加者がどのように活動を評価したのかという視点からの分析が必要であると考えられた。

そこで本研究では、障害者と健常者の参加者間の相互作用を明らかにするため、Becker（1982）が提唱する「Art World」の視点から、芸術活動を「一種の共同的行為（a collective activity）」として捉え、演劇活動における参加者の共同行為とそこで生じる参加者双方の相互作用を構造的に明らかにすることを目的とした。また、3年間の取り組みが終わった時点で調査を行うことにより、演劇プロジェクト全体を通して、地域社会へどのような発信をし、インパクトを与えたかについても検討した。

Ⅱ. 方 法

1. 対 象

本研究で取り上げる演劇プロジェクトは、北海道深川市にある障害者通所施設A（以下、施設A）の全利用者と職員、学生や地域住民のサポートスタッフが、演出家の指導の下に、共に演劇活動を行ったものである。施設Aは、指定障がい者福祉

サービス多機能事業所であり、約40名の知的障害者が利用していた（2018年11月1日現在）。

演劇プロジェクトは2016年から2018年の3年間に渡って行われた。インタビュー調査は、活動3年目の活動（公演）終了後に実施した。2018年の演劇活動は、7月から11月にかけて行われ、2018年11月18日に地域の市民ホールにおいて演劇公演を行った。なお、筆者らは、3年間サポートスタッフとしてこの演劇プロジェクトに参加し、フィールドワークを行なった。

インタビュー対象者は、演劇プロジェクトに参加していた施設Aの利用者9名と施設A職員1名、学生3名とした。利用者からのインタビュー対象者の選定にあたっては、事前に職員と打ち合わせを行い、会話によるコミュニケーションに大きな困難がない利用者の中から無作為に10名を抽出した。その中から、筆者の施設A訪問日にインタビューが可能であった9名に対してインタビューを実施した。学生3名は、施設の近くにある大学に通う大学生であり、利用者と一緒に演劇活動に参加していたボランティアのサポートスタッフである。

インタビュー対象者のプロフィールは表1に記した。

2. データ収集

本研究では、2017年に行ったインタビュー調査（松本・安井、2019）同様、対象者に半構造化インタビューを実施するとともに、質的研究を行った。インタビュー内容も、同じく2017年の調査（松本・安井、2019）結果を基に作成したインタビュー項目（表2）に準ずるものとした。

なお対象者は、利用者と職員、学生と3つの属性の者であるため、それぞれの属性に合う質問となるように、インタビュー項目を逸脱しない範囲で柔軟に対応するよう心がけた。

利用者へのインタビューでは、質問内容を簡潔に表現し、一度に1つの要素を尋ねるよう配慮した。さらに職員と相談の上、必要に応じて質問内容を視覚的に確認できるよう、ノートパソコンの

表1 インタビュー対象者のプロフィール

対象者	属性	演劇活動参加状況			性別	年代	備考	
		2016	2017	2018			施設A勤務年数 (インタビュー時)	利用している 障害福祉サービス
－	－				－	－		
A	職員	○	○	○	女	50代	18年	
B	利用者	○	○	○	男	20代	－	就労継続支援B
C	利用者	○	○	○	男	30代	－	就労継続支援B
D	利用者	○	○	○	男	40代	－	就労継続支援B
E	利用者	○	○	○	男	50代	－	就労継続支援B
F	利用者	○	○	○	女	20代	－	就労継続支援B
G	利用者	－	－	○	女	20代	－	就労継続支援B
H	利用者	○	○	○	女	30代	－	就労継続支援B
I	利用者	○	○	○	女	40代	－	就労継続支援B
J	利用者	○	○	○	女	40代	－	生活介護
K	学生	－	－	○	男	20代	－	－
L	学生	－	○	○	男	20代	－	－
M	学生	－	○	○	男	20代	－	－

表2 インタビュー項目

項目	内容
演劇活動で感じたこと	〈プラスの概念〉面白さ 楽しさ 嬉しさ 成長 効果 〈マイナスの概念〉不安感 大変さ 負担 悩み 課題
演劇活動について	演劇を見てくれた人に伝えたいこと 伝わってほしいこと（メッセージ性） この経験は今後に活かせると思うか どのように活かせると思うか 演劇プロジェクトを振り返っての感想
これからの活動について	芸術活動に期待すること 今後取り組んでみたい活動

画面に質問文を表示しながらインタビューを行った。

3. 期間及び場所

本調査では、2日にかけてインタビュー調査を実施した。2018年12月12日に7名、2019年1月10日に6名の調査対象者に対して、一対一の半構造化インタビューを行い、対象者の理解を得た上で内容をICレコーダーに録音した。

場所は、施設Aの相談室、施設Aの関係施設、対象者の学生が所属する大学の個別室を利用した。

インタビュー時間は、利用者に対しては、1名につき15分～25分程度、職員と学生に対しては、1名につき25分～35分程度であった。

4. 倫理的配慮

研究の目的や方法、プライバシー保護、研究への自由参加についての説明書を作成し、調査協力者に対して口頭と書面で説明を行うとともに、同意を得た。なお本インタビュー調査については、本学の研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：北教大研倫2017091005）。

5. 分析枠組み

2017年に行ったインタビュー調査研究（松本・安井，2019）同様，木下（1999，2003，2007）による，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）を参考にして分析を行った。ただし，M-GTAは具体例が少ない概念は採用しないため，本研究のように少数のデータ数に基づく研究に適していない側面があった。

そこで，生成した概念が成立するかどうかの判断には，筆者が本実践でのフィールドワークを行った際の記録を踏まえ，検討を行った。

6. 分析の流れ

分析テーマを「障害者の演劇活動における参加者の相互作用のプロセス研究」とし，分析焦点者を「演劇活動の参加者」と定めた。

分析の流れは以下の通りである。

まず，インタビューデータから，分析テーマに関連する箇所に着目して具体例を抽出し，分析ワークシートに転記した。その中で，抽出した具体例の中から他の類似例を説明できると考えられたものを概念とした。類似している複数の具体例は，1つの分析ワークシートにまとめ，暫定的に概念名と定義を記入した。概念名と定義は，具体例が揃うにつれて適宜修正した。具体例が複数出てきており，研究テーマから考えて重要だと思われるものや，インフォーマルなデータから具体例が散見されるものは，概念として採用し，複数の概念からなるカテゴリーを生成した。また，対極の概念や具体例が生成されないことを確認し，解釈が恣意的にならないようにした。最後に，カテゴリーの相互関係を分析の結果としてまとめ，簡潔に文章（ストーリーライン）化するとともに，概念とカテゴリーの関係を表す結果図を作成した。

分析は筆頭著者の松本が行い，分析全体を通して，共著者である安井がスーパーバイズすることで，分析の妥当性を確保するよう努めた。

Ⅲ. 結 果

1. 概念生成の実際

以下は，学生の語りから概念を生成する過程の一部を例示したものである。

「障害のある利用者と交流して感じたこと」について学生Kは，「（障害者に対して）かわいそうっていう印象をもつことがあんまり無くなりましたね」と語った。また学生Lは，「（障害者に対して）自分たちよりも弱い立場っていうイメージっていうのが強すぎて。本当はできるんだけど，いやできないでしょっていう考えが（以前は）ちょっとあったんですけど。それが（全く）無くなるわけではないですけど，払拭はできたかなっていう」と語った。さらに，学生Mは，「（障害者に対して）前みたいな怖さとか，そういうのは無くなったんですけど，ただ障害って何なんだろうって思ってしまった。演劇を通して障害ってものを全然感じなくて，自分たちと全く変わらないような立ち振る舞いをしているのを見て，障害ってじゃあ何だろうって，ただただ色々考えたくなる。」と語った。

この3つの具体例は分析焦点者が，「障害のある人たちと一緒に演劇活動を行なっていく中で，それまで感じていた障害者に対するマイナスなイメージを感じなくなり，障害者に対するイメージの変化を実感した。」と解釈できた。そこで，この概念を「障害者と一緒に演劇活動を行う中で，参加者の学生の障害に対するイメージが変化した」と定義し，概念名を〈「障害」に対するイメージの変化〉とした。他の概念も同様の手順で解釈し，概念の統合や削除を行いながら，最終的に26の概念を生成した。生成した概念とカテゴリーは表3に示す通りである。なお，以下の文章においては，【コアカテゴリー】，《サブカテゴリー》，〈概念〉のように表記している。

2. ストーリーラインと結果図

(1) 参加者の相互作用のカテゴリー

利用者とサポートスタッフの学生（以下，サポートスタッフとする）は，活動開始当初，《不安感》

表3 生成した概念一覧

コアカテゴリー	サブカテゴリー	概念
参加者の相互作用	不安感	セリフが言えるか不安 動きがわからない どう関わればいいのか
	大変さ	暗記に苦戦 何度も練習
	成長	役とシンクロする 個性を生かした表現 負けない努力 自主性の芽生え
	サポートスタッフとの関わり	交流が楽しみ 利用者とのやり取りが面白い コミュニケーション面での成長 リスペクト 仲間との絆 交流を続けたい
地域社会への発信	出会い	再会の機会 観客者からの言葉がけ
	障害観	知ってもらいたい 「障害」に対するイメージの変化 偏見を無くしたい
	—	貴重な経験
	演劇活動についての実感	達成感 継続したい 純粋な楽しさ
	今後に向けて	挑戦意欲 新しい目標

や《大変さ》を感じていた。利用者の《不安感》は、〈動きがわからない〉ことや、自分のセリフの〈暗記に苦戦〉し、〈セリフが言えるか不安〉に感じていた。また、〈何度も練習〉を繰り返すことの《大変さ》も実感していた。一方サポートスタッフは、利用者と同様に演劇における《不安感》も感じていたが、その他に、障害者との接触経験の少なさから、障害者と〈どう関わればいいのか〉という《不安感》を強く感じていた。

利用者は演劇活動を続けていくうちに、〈役とシンクロする〉ようになり、日常生活の中でも役のように振る舞ったり、逆に役の設定を自分ごとのように捉えて悩んだりするようになった。そして、次第に利用者は、〈個性を生かした表現〉を獲得していった。上記のような利用者の変化や成

長を感じたサポートスタッフは、利用者を〈リスペクト〉するようになり、自分たちも利用者に〈負けない努力〉をしようと取り組むようになった。その結果、これまで受け身であったサポートスタッフが自主的に行動するようになり、参加者全体に〈自主性の芽生え〉が感じられるようになっていった。

この変化や成長には、両者の交流によって生まれた意識が関係している。利用者は普段の生活で外部の人と交流する機会がほとんどなく、演劇活動時のサポートスタッフとの〈交流が楽しみ〉であった。サポートスタッフは当初、交流に《不安感》を感じていたが、それぞれが参加するグループで交流を続けていくうちに、〈利用者とのやり取りが面白い〉と感じるようになった。さらに、

この交流は両者に〈コミュニケーション面での成長〉をもたらすとともに、サポートする者とサポートされる者の関係性を超えて、互いに〈仲間との絆〉を感じるようになっていった。

以上の概念及びサブカテゴリーをコアカテゴリー：【演劇活動における利用者とサポートスタッフとの相互作用】としてまとめ、図1の左側に表した。

(2) 地域社会への発信のカテゴリー

演劇公演日、会場である市民ホールには、知人や、親族、地域住民等の観劇者が集まっていた。参加者は、公演後の「客出し」の際に、直接〈観劇者の言葉がけ〉を受けながら、〈達成感〉を感じていた。さらに観劇者の中には、本公演がきっかけで再会した知人も多く、本公演が〈再会の機会〉となっていた。

参加者は大きな〈達成感〉を感じたことで、感極まり、涙を流す者もいた。そして、演劇活動全体を通して〈純粋な楽しさ〉を感じてきたことから、この活動をこれからも〈継続していきたい〉と考えるようになっていた。

さらに、参加者は演劇活動での成功体験を経て、他のことに対しても〈挑戦意欲〉を持つようになった。そのような中、施設Aでは演劇活動後、別の行事への取り組みが始まり、参加者は「次はその〈新しい目標〉に向かって努力したい」と語っていた。

本実践は、参加者にとって、舞台に立つことだけではなく多くの人と交流できたことや、自分を表現できたことなど、多くのことが普段の生活ではできない〈貴重な経験〉となった。

一方で、本実践はサポートスタッフにとっても同様に〈貴重な経験〉であった。サポートスタッフの中には、将来、障害のある人を支える仕事をしたいと〈新しい目標〉ができた者もいた。

また、参加者はこの演劇公演をきっかけに施設Aや施設Aの利用者のことを地域住民に〈知ってもらいたい〉という思いがあった。さらに、演劇公演には多くの人に知ってもらい〈偏見を無くし

たい〉というメッセージも込められていた。

特にサポートスタッフは、本実践を通して自らの〈「障害」に対するイメージの変化〉を実感しており、地域住民が演劇を観ることや施設Aについて知ってもらうことで、〈偏見を無くしたい〉と考えるようになっていた。

以上の概念及びサブカテゴリーをコアカテゴリー：【地域社会への発信】としてまとめ、コアカテゴリー：【演劇活動における利用者とサポートスタッフの相互作用】からの広がりを表すように、図1の右側に表した。

Ⅳ. 考 察

1. 演劇活動における利用者とサポートスタッフの相互作用

筆者らのこれまでの調査研究の中で、利用者が演劇活動を続けるうちに、セルフエスティームが育まれるとともに、「利用者にポジティブな変化」があることを明らかにした（松本・安井，2019）。そして本研究では、「利用者とサポートスタッフの相互作用」について、構造的に表すことができた。

これまでの報告で、演劇活動などへの表現活動への参加が、障害者と健常者を結びつけ、相互の理解を深めたり、様々な気づきを生んだりするなどの機能を有することが指摘されている（板橋，2002；長津，2012；長津・中山・松井，2018；長津・中山・藤原，2019）。本研究においても、「利用者のポジティブな変化」は、「利用者とサポートスタッフの相互作用」の結果であったことが示唆された。

さらに、「利用者とサポートスタッフの相互作用」は、利用者のみではなくサポートスタッフにも大きな変容をもたらしていた。

サポートスタッフは、「一生懸命に演技をしている姿がなんか、ただただすごいなって思って」「普通の人と同じようなことをやっている、なんか最終的にはなんか普通にすごいなって」という語りにあるように、演劇活動を通して、利用者に

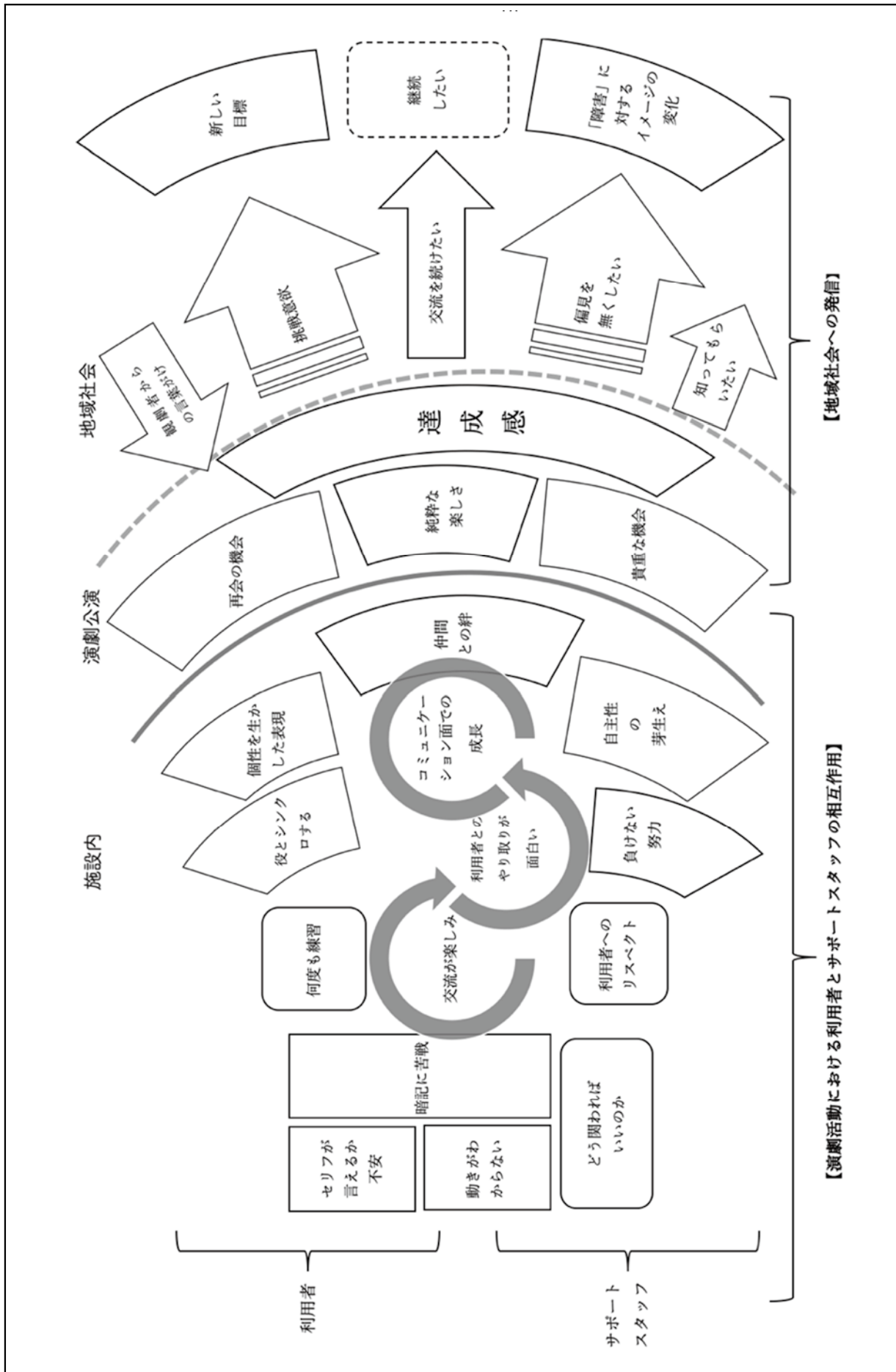


図1 インタビュー調査による障害者の演劇活動における参加者の相互作用のプロセス (結果図)

対して〈リスペクト〉するようになった。さらに、「(障害者に対して) 自分たちよりも弱い立場というイメージというのが強すぎて、本当はできるんだけど、いやできないでしょってというのが、考えがちょっとあったんですけど、それが(全く)なくなるわけではないですけど、払拭はできたかなっていう」と自らの〈「障害」に対するイメージの変化〉を実感していた。

健常者が障害者への認知や感情、行動を決定付けている要因については、様々な研究がなされてきたが、その中でも最も重要な要因の1つとして障害者との接触経験が挙げられる。しかし接触経験がそのまま交流意欲などを肯定的な方向に変化させるのではないことが指摘されており(河内, 2006), 学生などの場合は、接触の質の違い(すなわち、計画性の有無)が影響していることが示されている(河内, 1990)。

本実践においてサポートスタッフである学生は、ボランティアとして参加しており、自らの意思で参加していた。これまでの障害者との接触経験の少なさから、初めは戸惑いや不安感が強いようであったが、次第に利用者と打ち解け、利用者に対して仲間意識をもつようになった。このことから、利用者とサポートスタッフは、共同作業としての表現活動への参加を通し、支援者と被支援者の関係性からより「カジュアルな関係性」になっていたと推測できる。河内(2006)は、障害のある友人のいる者は障害学生との交流への抵抗感が弱いことを明らかにしており、先に述べた「カジュアルな関係性」への変化がもたらしたものだと推測できよう。

2. 地域社会への発信

演劇公演を終えて、参加者は障害の有無に関わらず大きな達成感を感じていることが明らかになった。

障害のある参加者は、「多くの他者に認められる経験をしたことが、利用者(障害のある参加者)のセルフエスティームを高め、自信を高めることに繋がる(松本・安井, 2019)」ことが明らかと

なっている。演劇プロジェクトを終えた〈達成感〉と前年度から継続して獲得し続けたセルフエスティームによって、次なる〈挑戦意欲〉を感じるようになったのかもしれない。利用者の、「大変だったけど、この3年間ほんとすごい楽しかったっていう。なんかまたやりたいなっていう気持ち」「新しい仕事をしてみたいなという感じですね」という語りからも、プロジェクトを終えても挑戦意欲が継続している様子がうかがえる。

Becker(1982)は、「共有された規則をお互いに評価することや、お互いにサポートを与え合うことによって、彼らには、自分たちがしていることはするだけの価値があるという確信が生まれる」「彼らの相互作用が、彼ら自身に、自分たちが生み出しているものは価値のあるアート作品なのだ」と確信させる」としており、共同の表現活動の場としての公演の経験を繰り返すことで、達成感が生まれ、アウトプットとしての次なる挑戦の意欲につながったのかもしれない。

一方障害のない参加者は、自らの〈「障害」に対するイメージの変化〉を実感するとともに、「やっぱりなんかそう障害者っていう概念っていうかそういうのを無くして欲しいですね」と語っているように〈偏見を無くしたい〉と考えるようになっていた。特に、「(この実践に参加したことが) これからの人生で一つのターニングポイントになった。もっともっと障害って分野を、もっともっと自分の視点で深めていきたいなって思えるようなきっかけができたかなって」と語るサポートスタッフもあり、このことは演劇という「アウトプット」が、障害理解教育やインクルーシブな社会を形成するために有効であることを示唆するものと思われる。

V. まとめと今後の展望

本研究で取り上げた3年間の演劇プロジェクトは、表現活動の場としての公演を繰り返すことで、地域社会における障害の認知に結びつくとともに、利用者と支援者に多様な相互作用を生み出し

ていた。

演劇プロジェクトの取り組みが終わっても、参加者の〈挑戦意欲〉は継続し、翌年の2019年から2021年現在にかけて、次の芸術活動プロジェクトである、「和太鼓の演奏活動」に取り組んでいる。

この和太鼓の演奏活動は、地域の保育園や他の障害者通所施設の利用者との共同の取り組みとなっており、芸術活動が、さらに裾野を広げて地域に根付こうとしている。この意味で、演劇プロジェクトは、「一過性のお祭り」でとどまることなく、地域における障害者の芸術活動を活性化させるきっかけとなったことがわかる。

今後は、このような取り組みを日本各地で展開できるよう、地域における障害者の芸術活動の実態調査や、取り組みの情報の共有の在り方について、調査していくことが求められる。

謝 辞

本研究を行うにあたって、ご理解・ご協力いただいた障害者通所施設Aの職員の皆様、利用者の皆様、サポートスタッフの皆様をはじめ、演劇プロジェクト関係者の全ての皆様に感謝申し上げます。

文 献

- Becker・H・S (1982) *Art Worlds*, The University of California Press, 後藤将之訳 (2016) アート・ワールド, 慶應義塾大学出版会.
- 文化庁 (2017) 文化芸術振興基本法の一部を改正する法律の施行について (通知), 文化庁.
- 文化庁 (2018) 障害者による文化芸術活動の推進に関する法律の施行について (通知), 文化庁.
- 文化庁 (2019) 障害者による文化芸術活動の推進に関する基本的な計画, 文化庁.
- 板橋義也 (2002) 多様化する障害者の芸術文化—「障害者とともに創る文化活動」ワークショップの実践から—, 一番ヶ瀬康子・園田碩哉編, 余暇と遊びの福祉文化, 明石書店, 104-114.
- 河内清彦 (1990) 学生および教師の視覚障害者観, 文化書房博文社.
- 河内清彦 (2006) 障害者等との接触経験の質と障害学生

- との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度, 友人関係, 援助行動, ボランティア活動を中心に—, 教育心理学研究, 54(4), 509-521.
- 木下康二 (1999) グラウンデッド・セオリー・アプローチ質的実証研究の再生, 弘文堂.
- 木下康二 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践質的研究への誘い, 弘文堂.
- 木下康二 (2007) 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析方法, 富山大学看護学会誌, 6(2), 1-10.
- 松本奈津実・安井友康 (2019) 障害者の演劇活動がもたらす社会関係性の変容—実践参加者へのインタビュー調査から—, 北海道教育大学大学紀要, 教育科学編, 70(1), 145-153.
- 長津結一郎 (2012) 障害と芸術の「共犯性」—表現活動に関わり合う人々の協同に向けた一考察—, 障害学研究, 8, 107-131.
- 長津結一郎・中山博晶・松井志穂 (2018) 演劇ワークショップの社会包摂的側面への期待とその実際—特別支援学級における演劇ワークショップを事例に—, 芸術工芸研究, 29, 21-31.
- 長津結一郎・中山博晶・藤原健司 (2019) 障害のある人が表現活動にかかわる場におけるファシリテーションの分析に向けた考察—演劇・ダンスワークショップのフィールドワークを通じて—, アートマネジメント研究, 20, 45-55.

(松本奈津実 札幌校大学院教育学研究科
令和元年度修了)

(安井 友康 札幌校教授)

